大分合同新聞

外国人宿泊客・県内は？

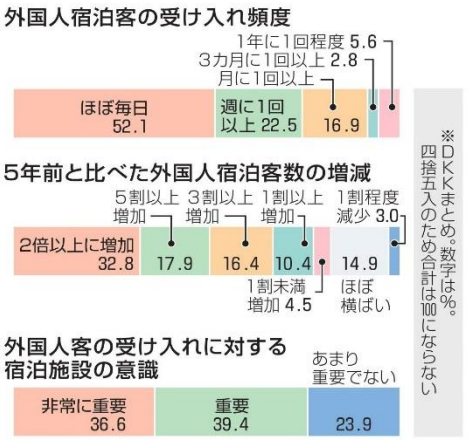
ワークシート

年　　組　　名前

① 外国人宿泊客の増加を宿泊施設側はどうとらえ、動いていますか。記事中の言葉を使ってまとめましょう。

② 調査では外国人宿泊客の今後をどう見ていますか。記事から読み取りましょう。

③ 記事の最後にある「大分県を世界に発信する」を実現するためのアイデアを、自由に考えてみましょう。



宿泊施設の外国人受け入れ

「ほぼ毎日」過半数

外国人の宿泊客の受け入れ頻度は「ほぼ毎日」が過半数に上り、客数は5年前に比べ「倍以上に増加」が3割を超える―。シンクタンクの大銀経済経営研究所（DKK）が大分県内の宿泊施設を対象にした調査で、東アジアを中心に年々増えるインバウンド（訪日外国人観光客）が県内観光業の経営にとり「欠かせなくなりつつある実態」（DKK）が浮かんだ。

県内調査

今年3月、従業員10人以上の主な宿泊施設160社（15市町）にアンケートした。回収率は44・4％。

外国人宿泊客の受け入れ頻度は「ほぼ毎日」と答えた割合が最多の52・1％を占めた。由布市（12施設）では8割、別府市（23施設）では6割をそれぞれ超えた。5年前と比べた外国人客の増加は「2倍以上」が最多の32・8％に上り、「5割以上」の17・9％、「3割以上」の16・4％が続いた。

5年前比 3割が客数倍増

宿泊施設の受け入れ意識も高まっている。経営にとって「重要」と答えたのは39・4％、「非常に重要」の36・6％と合わせて計8割弱にも上る。各施設でWi-Fi環境の整備やカード決済の充実、外国語による館内案内などの対応が進んでいる。

現状で宿泊客全体に占める外国人の割合は「1割未満」が最多の47・9％ではあるものの、国内客が減少傾向にあるのに対し、海外客は新興国の経済成長などに伴い今後も増加が続くとみられる。加えて2019年はラグビーワールドカップ大分開催を控える。

DKKの川野恭輔調査企画部次長兼主席研究員は「大分県を世界に発信するチャンス。欧米など多様な国からの誘客に磨きをかけることが求められる」と話した。

（渡辺大祐）

（2017年12月4日付朝刊1面）

メモ　観光庁の統計によると、2016年に県内を訪れた外国人延べ宿泊者は83万人。11年の36万人に比べ2.4倍。17年は1～6月の上半期（速報値）で「既に71万人に達し、100万人突破は確実な見通し」（DKK）。県内を訪れる国別では地理的に近い韓国（54.3%）が圧倒的に多く、続いて台湾（13.6%）、中国（9.8%）、香港（8.0%）など。全国に比べると欧米からの割合が低い。